

中国語学史へのアプローチの仕方に見る 日中間の違い

The Difference in the Way of Approaching
“the History of Chinese Language Studies”
between the Japanese and the Chinese

後 藤 奈智子

GOTO Nachiko

Through the comparison of some books written by Japanese and Chinese scholars on “the history of Chinese language studies,” we can find that there are some similarities and differences in how Japanese and Chinese approach this topic. Such features are as follows:

the similar point of view:

According to a time-line of Chinese history, both the Japanese and the Chinese move their points of view from the ancient times to the present day.

the different point of view:

The Chinese, first of all, divide a time-line into certain periods that have distinct characteristics and then try to make one major studying approach in “the history of the Chinese language studies.”

On the other hand, the Japanese do not divide a time-line as the Chinese do, but rather they look at the literature that have similar characteristics. By looking at several streams of thoughts, they then try to organize them all into one major perspective in “the history of the Chinese language studies.”

1 . はじめに

事物にはいろいろな側面がある。それゆえ、ある一つの事物について述べる場合でも、切り口が異なれば、結論は同じでも辿るプロセスは異なる。切り口が異なるということは、事物を見る視点が異なるということであり、事物を見る視点が異なるということは、思考方法が異なるということに往々にして繋がる。

さて、思考方法の違いの原因には大きく分けて二通りあると思われる。一つは、個人的なもの、もう一つは文化的なものである。

当然、学術研究の分野においても様々な切り口が存在するのであるが、文化的背景を同じくする集団ごとにその切り口に類似性が見られる場合も多々ある。中国語学史¹の切り

口についても同様のものである。中国人と日本人はそれぞれ異なった視点から中国語の歴史を眺めているようである。

では、両者の間に、実際にどのような違いが認められるのであろうか。それを具体的に見ていくとともに整理するのが本稿の目的である。

2. 中国人のアプローチの仕方

時間軸に沿って、太古から現代へと通時的に見ていくのが一般的である。しかし、その中でも注目すべきは、時代を区切り、その区切った時代ごとに特徴を述べている点である。

では、実際には、どのように時代を区分し、その特徴に言及しているのであろうか。ここでは、中国人が執筆した6つの書物を探り上げ、各書物ごとにそれらを見ていくことにする。

2.1 王力の『中国言語学史』

まず、王力氏の『中国言語学史』を概観する。本書は、周法高氏による「…王力の『中国言語学史』はこの学問（中国言語学）²に対してなされた初めての全面的な叙述であり、その貢献が磨滅することはありえない。」³という言及や、趙振鐸氏による「この書は科学的に中国言語学の歴史を整理し、中国言語学史にはっきりとした輪郭を引いたが、それは大変な困難を伴うものであった。その開拓の労が磨滅することはありえない。今日、中国言語学史を語る場合、この書を離れて語ることはできない。」⁴という言及からも分かるように、その後の中国言語学史の流れの基本になっている。

それでは、本書がどのように時代を区分しているのか見てみよう。本書は次のように4つに時代を区分する⁵。

訓詁を主とする時期（先秦から漢）

韻書を主とする時期（漢末から明）

文字・音韻・訓詁が全面的に発展した時期（清初から1898年）

西学東漸の時期（1899～1949年）

まず、訓詁を主とする時期（先秦から漢）では、中国言語学史上、訓詁学が最も早く出現したと述べている。その先駆けとなったのは『論語』を始めとする四書五経や識字教科書である小学書であったとする。また、サンスクリットのような文法が必要でなかったのは、中国語が語を分析するものであり、形態変化が殆ど無いからだとしている。方言学の起こりは国家の統一により方言の複雑さが人々の注意を引くようになったため、字書の出現は字形や意味が変化したためであり、声訓が盛んになったことで言語の語音と語義の関係が考察されるようになったとしている。そして、それぞれ代表的な書物名を複数挙げ、それらを紹介するのみならず、個々の書物の具体的内容にまで踏み込んで詳しく説明している。訓詁の萌芽に関しては荀子の『正名篇』などを中心に、小学書では『史籀篇』や、三倉と言われる『倉頡篇』・『訓纂篇』・『滂喜篇』、また『爰歴篇』、『博学篇』、『凡将篇』、『急就篇』、『元尚篇』などが挙げられている。方言学では『方言』、字書では『説文解字』

や『爾雅』、声訓では『釋名』などが中心となっている。

次に、韻書を主とする時期（漢末から明）であるが、この時期の言語研究の特徴は音韻学が優勢を占めたことだとする。それまでは、表意文字である漢字は概念を直接表すことができるのだから音声言語の仲介は必要ないという考えが横行していた。ところがサンスクリットの影響を受けて反切が発生し、反切の影響を受けて韻書が出現すると、音声は言語の重大な要素であり、音韻の研究なしに言語の研究はできないという気が生まれたのだという。これらを、反切の起こりとその応用、韻書（上）、韻書（下）、等韻学、六朝から明代の文字学と訓詁学、という小見出しごとに概観している。反切の起こりとその応用では、まず、反切の説明を具体例を示して行うとともに、反切がそれまでの直音法に取って代わったことに言及し、さらに反切に関するいろいろな人の考えを紹介している。次に、反切に使われる文字を複数の書物から抜粋して比較したり、書物ごとに採用される反切を系統づけたりしている。韻書（上）では、韻書の基礎や性質を明らかにしようとする試みを多くの具体的書物に求めているが、その中心はやはり『切韻』系韻書である。韻書（下）では、『集韻』、『五音集韻』、『壬子新刊禮部韻略』、『古今韻会举要』、『中原音韻』、『洪武正韻』について、反切や韻目などに具体的に言及しながら各書物の内容を紹介している。等韻学では、36字母の制定に言及した後、韻図を3派に分け、それぞれ書物の具体的名称や韻区分の特徴・内容などについて詳細に述べている。王力によれば、その3派とは、『韻鏡』・『七音略』、『四聲等子』・『切韻指掌圖』・『切韻指南』、『韻法直図』・『韻法横図』・『字母切韻要法』・『類音』の3派である。六朝から明代の文字学と訓詁学では、この時期のこれらの分野は音韻学に比べると遜色があるとはいえ、学術の発展を全面的に見ていく上では省略できないとして、この分野の書物を複数挙げ、その内容と特徴に言及している。

文字・音韻・訓詁が全面的に発展した時期（清初から1898年）では、清代は中国言語学の隆盛期であるとして、清朝考証学派を中心に述べている。『説文解字』に対する研究にはどのようなものがあつたかを、段玉裁・桂馥・朱駿聲・王筠という四人の研究者名とその著作を具体的に挙げ、さらにその内容について詳説している。また、文字に関しては、甲骨文と金文の二方面から考察している。甲骨文では、文字解読の手法を中心に述べ、金文では、呉大澂・王国維・郭沫若の三人の研究者名を挙げ、彼らの著作や研究手法について述べている。音韻に関しては、古音学者として顧炎武・江永・戴震・段玉裁・孔広森・王念孫・江有誥・黄侃・章炳麟・錢大昕を挙げ、彼らの業績を詳説している。訓詁学に関しては、王念孫・王引之・郝懿行・俞樾・章炳麟の名を挙げ、彼らの業績を詳説している。

西学東漸の時期（1899～1949年）では、馬建忠の『馬氏文通』を中国最初の文法書とし、これを起点に、勃興期と発展期に分けて概観している。勃興期では、馬建忠・楊樹達・黎錦熙の名を挙げ、彼らの著作とその内容に言及している。発展期では、王力・呂叔湘・高名凱の名を挙げ、彼らの著作とその内容に言及している。また、カールグレンやマスペロなど、西欧の中国語学者の名を挙げ、彼らの著作とその内容にも言及している。

2.2 周法高の『論中国語言学的過去、現在和未来』

周法高氏は『論中国語言学的過去、現在和未来』で、中国の伝統的な「小学」や「文字学」はphilology（語文学）の範囲に属し、linguistics（言語学）とは性質が異なるものであるという考え方のあることを示した上で、過去の中国言語学について述べるに当たって

は、緩い基準を採用すると言っている⁶。これはつまり、過去の中国言語学については「語文学」を離れて言及するのは妥当ではないということであろう。

また、周氏は伝統的中国言語学の特徴について、次の4つを挙げている。それは、実用を重んじていること、古代に対する研究を重視していること、文字を重視していること、外来文化の優れた点を吸収し完全に融合させ取り込んでいること、である。

こうした考えの下に、周氏は中国言語学史を次のように5つに時代区分する。

上古期（先秦から漢末、紀元前3世紀～紀元3世紀）

中古期（漢末から五代、3世紀～10世紀末）

近古期（宋から明、10世紀末～17世紀初め）

近代期（明末から五四、17世紀初め～1920年）

現代期（1920年以後）

まず、上古期であるが、漢以前の思想家の中には言語に対し種々の意見を持っている者もいたが、それはまだ専門的なものではなかったとする。漢代に經学が盛んになるにつれ小学書が出現したとし、前漢初の『爾雅』、前漢末の揚雄の『方言』、後漢初の許慎の『説文解字』、後漢末の劉熙の『釋名』を最重要書物として挙げ、説明を加えている。

次に、中古期であるが、漢末に反切が発明されたこと、またその方法を具体的に紹介するとともに、反切がそれまでの直音や近似音の表示に取って替わったことに言及している。また、魏の李登の『聲類』、晋の呂静の『韻集』以後、韻書が出現し、隋の陸法言の切韻に至って集大成されたことや、字書には、晋の呂忱の『字林』や梁の顧野王之『玉篇』があり、訓詁では魏の張揖の『廣雅』や唐の陸德明の『經典釋文』があることを述べている。このほか、僧侶たちが仏典の音義を書いたことにも言及し、その最も著名なものとして唐の玄應の『一切經音義』と慧琳の『一切經音義』の名を挙げる。また、唐末には僧侶守温によって字母が制定されたという言語事実にも言及している。

近古期は、等韻図が非常に発達した時期であるとする。韻書では、『切韻』の系統を継承する『大宋重修廣韻』や『集韻』が出現したほか、金の韓道昭の『五音集韻』、元の黄公紹の『韻會』、明初の『洪武正韻』も出現したとし、最も突出したものは元の周德清の『中原音韻』だと述べている。このほか、文字学、古文字学、古音学、訓詁学などにも多くの成果が見られたという。

近代期は二つの面から見ることができるとし、清代を中心として經学が復興し小学の研究も飛躍的に前進したという面、明末以降、西洋の学問が流入し宣教師や外交官などが中国語に関する著作を著した面とに分けて述べている。前者は、古音・韻書・訓詁学・文字学・古文字学などにさらに分類し、研究者名と書物名を列挙している。後者は1898年に馬建忠がラテン文法の影響を受けて書いた『馬氏文通』を、中国人が書いた体系的な文法書として紹介している。

現代期になると、中国言語学は新しい道を歩き始めたとし、歴史音韻学、文法学、方言学、訓詁学、古文字学、総類、の6つの分野に分けた上、それぞれの分野における研究者名と書名を列挙するという形で紹介している。

2.3 周祖謨の「漢語発展的歴史」

周祖謨氏の「漢語発展的歴史」は、次の6つに時代を区分する。

上古前期（紀元前771年以前。商～西周末。）

上古後期（紀元前770～紀元219年。周の平王の東遷後から春秋戦国および秦・漢。）

中古（220～588年。魏・晋・南北朝。）

近古（586～1126年。隋・唐・五代・北宋。）

近代（1127～1918年。南宋・金・元・明・清・五四運動前。）

現代（1919年以後。五四運動以後。）

上古前期の主要文献は、商代の卜辞、西周の銅器の銘文、『尚書』の一部であるとし、それらの内容および特徴を紹介している。商代の卜辞は、文は簡明で短く、基本語彙および文法構造の基本形式は後代と同じであること、文には、叙述文・否定文・疑問文があり、簡単な文もあれば複合文もあることに言及している。文字の形体が、複雑な図形から簡単な構造へと発展したこと、文字には、象形・表意・形声・仮借があることも述べている。また、西周の銅器の銘文はどれも長めで、中には500字近くに達するものもあることや、銘文には韻を踏んだものが多いことから、文字の記載がすでに繁雑になりつつあったことにも言及している。しかし、文章は難解で古めかしく、虚詞もあまり出現しないことなども述べている。

次に、上古後期のうち、周の平王の東遷後から春秋戦国にかけては、“雅言”と言われる一種の交際用語（意思疎通に用いる言葉）が形成されたこと、それは黄河中下流域の大国の言語が基になっていること、また『詩経』や『書経』を暗唱する人が増え、文法の規範も徐々に一致していったことが述べられている。そして春秋戦国期は、古漢語書面語の規範が定まり、言語の語彙が大きく発展したとある。特に二音節語の増加が顕著なこと、大量の新語が加わり語彙が豊富になり始めたが、それらは後代にまで引き継がれているものが多いことが述べられている。文法面では、一文が長くなり、異なる語彙・文法意義を示す虚詞も多くなり始めたこと、特に『論語』や『孟子』は虚詞の記録が最も完備されており、後代の書面語に極めて大きな影響を与えていることが言及されている。音声面では、各地の音声は完全に同じというわけではないが、『詩経』・屈原や宋玉の辞賦・戦国諸子の韻文から見ると、作者は同一時期・同一地方の人ではないのに押韻の部類は基本的に一致していることから、春秋戦国時代の漢語がすでに中国の広い地域における地域共通語になっていたことが証明できるとしている。文字面においては、音が同じ、もしくは近いことによる仮借字が比較的多く、一つの文字がいくつもの文字の代わりに使用された時期もあることを、“侍”という字が、“待”にも“恃”にも代用可能だった事実を挙げて示している。形体面では、各国の文字はいずれも簡単な方向に向かう情勢であったが、各々異なる部分があったため、秦人は複雑な籀文を使用していたこと、しかし秦の始皇帝の天下統一により文字も統一されたことが示されている。そして秦漢時期には、文字を統一し、小篆を応用し、同時に篆書体を簡単にした隸書体が起こり、その後、草書体もできたこと、新たに生まれた語彙を適切に記録するため、また同音仮借字を適度に減らすため、新しい文字が多く生産されたことが述べられている。詩文作品の押韻状況は春秋戦国時代と大体同じで

あったこと、方言は地域ごとに異なっていたが、人の移動に伴い黄河の南北では言語は歩み寄りの方向へと進んでいたことも記載されている。文字面から見ると、漢代の口語は史記などに記載された書面語とはすでに異なっていたこと、また、その語彙は春秋戦国時代より豊富になったこと、西域を通して仏教が中国に入ってきたことにより外来語も増加したことなども述べられている。文法面では、疑問代名詞目的語の後置や、“是”の文字を繫詞として使用する等、いずれも以前はあまり見られなかった特徴がみられるようになったということも示されている。

中古は、音声面では漢以前とは大いに異なっているのであるが、魏晉期がその大きな転回点であるとしている。なぜなら、それまでは入声韻は陰声韻と関係が緊密であったが、魏晉期になると陽声韻と関係するようになり、韻部の区分もそれまでとは異なるようになったり、それまでは去声の字は少なかったが、魏晉以後は去声の字が多くなったからだという。また、齊・梁以後は音韻変化が更に大きくなり、韻は轉移し、声は分化し、声韻システムは以前とは異なったものになったことや、隋の陸法言の『切韻』が、齊・梁～隋初の期間の語音システムの代表であることなども述べている。さらに、この時期は二音節語の増加が比較的多かったことや、数学・医学等の自然科学や農業の発展により多くの専門語彙が生まれたこと、仏教の影響を受けた語や外来語が大量に増加したことなども大きな特徴だとしている。文法面では、口語に近い文字の使用が非常に明確になってきたことを、代名詞“伊”・“渠”の出現や、受け身文の出現などを例に挙げて示している。重要な作品には、南北朝の樂府歌辭、晋の『法顯行傳』、宋の劉義慶の『世說新語』、北魏の賈思勰の『齊民要術』、仏教の翻訳文があるとしている。

近古は、アジア諸国との接触が多くあった時期だとする。言語面では、人々の移動が加速されたため、方言が融合・集中の方向へ進んだという。唐代中期以後、口語に近い作品が多くなったが、仏教説話を歌う変文は当時の北方方言の様相を代表し、仏教の禪師語録は南方のどこかの方言様相を代表するという。文法面では、「把字句」・「這」・「那」・「甚麼」・「恁麼」のような新しい形式と用語が出現したこと、語彙面では、大量の二音節語が現れ、漢語語彙に占めるその割合は徐々に拡大した上、唐代に出現した二音節語の大部分が現在まで用いられていることなどを述べている。音韻面では、唐代の科学試験では『切韻』系韻書が基準となっていたが、実際の口語の読音は、韻書とはすでに完全には同じではなくなっていたことを示すとともに、その特徴を、声母の分化、韻母の合併、音韻の分類の減少であると、具体的に示している。また、北宋期は、北方の音声変動が最も大きいのが特徴であるとし、その具体例として、濁声母が清声母になり、濁音上声字を去声で読むようになったことや、韻部が減少したこと、-k と -t の入声韻尾が脱落、もしくは声門閉鎖音になったことを挙げている。文法面では、動詞の後ろの“了”・“着”が時態を表す形式がすでに確立したこと、人称代名詞の複数語尾も書物でみられるようになったことが特徴だとしている。

近代については、街中で歌を歌ったり、語り物をしたり、話をしたりする人や、「話本」・「小説」などの口語文学作品が言語の発展に与えた影響が最も大きいとする。元・明・清は都が北京にあったため、北京語を用いた文学作品が多かったこと、文学作品では口語を主とすることが根付いてきたことにより、北京語を主とする北方普通話が全人民共通の普通話の基礎となったこと、さらにこの種の普通話には16～19世紀には“官話”と呼ばれ、通

用範囲も徐々に拡大したこと、ただ、呉語、粵語、閩語、客家語などは官話とは異なっており、それぞれ特徴を持っていたことなどが述べられている。また、この時期、西洋からの知識の流入により自然科学と社会科学に関する新語が大量に出現したり、音訳された外来語や日本語からの借入語も多くなったことで、漢語の語彙が増加したことも述べられている。そのほか、音声面では、この時期、北方語の声母は清濁の区別がすでに無くなり、平声は陰・陽の二つの調類に分かれ、ほとんどの地域で入声はすでに消失して平・上・去の三声のいずれかになっていたことが述べられている。例えば、林・深・心・三・南などの字は唐代以前の・m 韻尾から徐々に・n 韻尾へと変化し、南方の長江一帯では、入声字の・p 韻尾が・k 韻尾へと変化を始め、後に入声韻尾の・k と・t は声門閉鎖音になり、最終的には消失し、陽声韻尾・ng は・n と読むようになったところが多いということである。

現代であるが、漢語の発展は五四運動以後、新たな時期に入ったとする。白話文が広く広まり新しい文体となり、大量の外国の文学・哲学・科学技術の書物の翻訳により、言語面で多くの外来語を吸収するのみならず、文法面でも多くの変化が出てきたという。例えば、語の構成法では、「化」や「性」などの多くの新しい成分を使用するようになったこと、文構造においては、ヨーロッパの文法の影響を受けて新たな表現形式が増加したことなどが挙げられるという。語義の面では、それまで形容詞だったものが動詞としても使えるようになり、動詞は名詞としても使えるようになったことが挙げられるという。書面語においては、修飾語が増え、語句の構造は精密かつ複雑なものになり、修辞の手段も文法規律と結びつき、形式面でさらに多様化が進んだことも特徴だという。

2.4 朱星の『中国語言学史』

朱星氏の『中国語言学史』は、次のように3つに時代を区分する。

上古（周・秦・前漢・後漢）

中古（魏晉南北朝から宋元）

近古（明から清末）

上古（周・秦・前漢・後漢）は、中国語の研究の礎となる時期だという。中国で最初の言語研究論文として『荀子・正名篇』を挙げている。また、秦から漢末にかけては、『史籀篇』などの字書や、『爾雅』、『方言』、『説文解字』、『釋名』、『詩毛傳』、『鄭箋』のような訓詁研究の書などが編纂されたとしている。そして、それぞれの書物の特徴や内容を詳細に述べている。

中古（魏晉南北朝から宋元）は、音韻や文字の研究がさらに進んだ時期だという。サンスクリットの影響で反切が発明されたこと、反切の影響で韻書が編纂されたこと、唐末の36字母の発明により等韻図が出来上がったことなどを述べている。また、韻書の影響で、『文心雕龍』に見られるような修辭論・声律論が起り、『説文解字』が重視されたことにより、『校定説文』や『説文繫傳』などが、俗字の横行などにより『干祿字書』などの実用文字学の書が、また新しい曲韻書として、当時の口語を反映した『中原音韻』が編まれたとしている。そしてこの大まかな流れをより詳しく見るため、『經典釋文』や『一切経音義』などの音義書、『玉篇』以後続々と編纂された実に多くの字書、『刊正説文』や『六

書略』などの古文字研究の書、『切韻』に始まる多くの韻書、『韻鏡』や『七音略』のような韻図を一つ一つ採り上げ、丁寧に解説している。

近古（明から清末）は、言語や文字の研究が全面的に発展した時期だという。この時期、マテオ・リッチやニコラス・トリゴーなどにより、ヨーロッパの多くの新学識が中国へもたらされ、顧炎武や江永らにより古音学が盛んになり、その古音学は訓詁学にも影響を与えたという。また、文法面では、虚詞の研究から『馬氏文通』へと進歩したという。五四運動以後は現代言語学史と言えそうだが、次の三派に分かれているという。それは、ラテン化文字を提唱した魯迅らのグループ、清朝考証学を継承するグループ、西洋のものを受け入れ模倣するグループ、とのことである。これらを、やはり、多くの学者名とその著作を挙げ、さらに各々の書物の内容を具体的に示すことで掘り下げている。

2.5 趙振鐸の『中国言語学史』

趙振鐸氏の『中国言語学史』は、次のように6つに時代を区分する。

先秦時期

前漢・後漢の時期

魏晉南北朝から隋唐五代の時期

宋元明の時期

清代から五四以前まで

五四から1980年代まで

先秦時期は、中国言語学の萌芽期とみなすことができるとしている。諸侯が乱立していた時期であり、同時に學術思想が活発で哲学者の著作中に言語問題に関する論述がたくさんあるとして、孔子・老子・墨子・荀子・孟子などの著作や当時の文献を挙げ、その内容から、当時、一種の共通語のような「雅言」の使用が奨励されていたことや、文献中の押韻状況から、音韻に関する実際の状況が具体的に報告されている。そして、このような状況の基礎の上に訓詁学が発展し、訓詁学の発展に伴い古書に注釈することが行われるようになり、それが辞書の誕生を促したとする。また、具体的な辞書名として『爾雅』を挙げ、その内容にかなり詳しく踏み込んでいる。その後、『爾雅』の影響を受けて誕生した、漢の揚雄の『方言』、劉熙の『釋名』を挙げ、『爾雅』との継承関係を具体的に述べている。また、後代に『爾雅』の体例を受け継ぎ『~雅』という名前の書物が多く刊行されたことや、『続日本記』に『爾雅』の記載があることなどにも言及している。

前漢・後漢の時期は、中国言語学の確立期だとしている。經学が大きく発展し封建社会の思想を支える柱となり、經学の発展がこの時期の言語研究に影響を与えたという。この時期は、古籍の注釈に対する言語分析を通して、言語そのものの変化を捉えている。また、実に多くの書名が挙げられているが、その説明に大きく頁を割いているものには、揚雄の『方言』、許慎の『説文解字』、劉熙の『釋名』がある。『方言』は方言語彙の収集との関係から、『説文解字』は漢字の研究との関係から、『釋名』は声訓との関係から述べられている。さらに、語音を示す方法については直音を用いる方法から反切を用いる方法へと変化したことが、書物から具体例を採り上げる形で示されている。

魏晉南北朝から隋唐五代の時期は、中国言語学の更なる発展期と位置づけている。音韻学上の成果が目を見張るものである上、訓詁学の成果もあったからだという。この時期は、音韻面では、サンスクリットと漢語の対比から、玄応が『一切経音義』を、慧苑が『華嚴経音義』を、慧琳が『一切経音義』を著しているとし、これらの著述の内容に具体的に言及している。訓詁学では、唐代の注目すべき義疏の書として、孔穎達の『五経正義』、顔師古の『漢書注』、李善の『文選注』を挙げ、やはりその内容にも言及している。また、『爾雅』や『方言』などに注を付した郭璞にも言及し、さらにそれらの書物の内容や特徴も具体的に紹介している。その他、音義の書として陸徳明の『經典釋文』も採り上げている。字典に関しては、『説文』と『字林』を採り上げ、その内容を比較しながら紹介している。また顧野王の『玉篇』も重要だとして言及している。さらに『干祿字書』や『五経文字』などにも言及している。そして韻書については、反切の発明が韻書の成立を促したと述べ、早期の韻書として、魏の李登の『声類』、西晋の呂静の『韻集』を挙げ、説明を加えている。さらに陸法言の『切韻』や『広韻』を挙げ、その内容まで詳細に紹介している。また、韻書の音韻構造を分析するため等韻学が出現したとし、さらには敦煌出土の文献の中身にまで言及している。

宋元明の時期は、封建社会が下り坂の時期にあり社会が停滞していた。そして、その社会の停滞が学術の衰退を引き起こしたため、言語研究には語るべきものなどないと、清代の学者は不適切な評価をしているが、実際には、中国言語学研究の範囲の拡大期なのだという。この時期は、辞書の編纂が活発であったという。宋の四大書である『太平御覧』、『太平広記』、『文苑英華』、『冊府元龜』や、『広韻』、『集韻』、『類篇』の出版、『玉篇』の修訂が行われ、明代になると『洪武正韻』、『字彙』、『正字通』も編纂されたという。そして、これらの辞書の内容が具体的に詳細に示されている。『字彙』と『正字通』などは、内容の比較までなされている。また、この時期は俗語が多く記録されているとして、それらも採り上げられている。この他、漢字の解釈において右文説⁷が起こったことなども紹介されている。音韻学では、『韻鏡』、『七音略』、『切韻指掌圖』、『四声等子』、『切韻指南』、『中原音韻』が編まれたことやその内容に言及している。また、文法の研究成果として、虚詞内部の区分が明確になったことを具体例を示して述べている。

清代から五四以前までの時期は、社会の発展が言語研究を推進した時期だとする。古音学の成果が訓詁学の発展を促し、古代の重要な言語学の文献が全て整理された時期であり、『馬氏文通』の出版が文法研究の新しい紀元を拓き、甲骨文の発見が古文字研究を促進したのだという。伝統的言語学を引き継ぎながらも、言語研究を新しい境地へと引っ張っていく傾向が見られたという。辞書の編纂は特に盛んで、『康熙字典』、『四庫全書』などを始めとする大部の辞書が数多く編まれたとし、それらの名称と内容を具体的に紹介している。また、清朝考証学の分野については、顧炎武、江永、戴震、段玉裁、王念孫、孔広森、江有誥らの名前を挙げ、彼らの著作について内容を詳説している。この他、官話や方言についても研究がなされるようになったことや、清末の言語学者の代表として章炳麟と黄侃の名前と業績を挙げている。

五四から1980年代までは、中国言語学史の新時期と位置づけている。外国から入ってきた一般言語学理論で中国語研究を指導したり、伝統言語学の成果を解釈したり、漢語の方言や中国内の少数民族の言語の調査研究をしたりするようになったからだという。外国から入ってきた一般言語学理論については、ブルームフィールド、ソシュール、サビアなど

の名前やその著作を挙げ、それらを中国に紹介した第一人者として張世禄の名を挙げ、彼の『語言学原理』の内容を詳説している。また、岑麒祥、方光燾の人物と著作についても言及している。さらに、マルクス主義の影響を受けた学者として高名凱の名を挙げ、彼の著作である『普通語言学』や『語言論』について述べている。音韻学に関しては、カールグレン、趙元任、李方桂、羅常培、王力、王静如、曾運乾、趙蔭棠、林語堂、錢玄同、陸志韋の名前と、彼らの著作およびその内容を紹介している。また、敦煌資料の整理研究については、王国維、魏建功、周祖謨の名前と彼らの著作を紹介している。方言調査については、カールグレン、趙元任、羅常培などの名前と彼らの著作を紹介している。以下、同様に、いろいろな分野における注目すべき研究者とその著作が紹介されている。

2.6 濮之珍の『中国語言学史』

濮之珍氏の『中国語言学史』は、次のように5つに時代を区分する。

先秦時期

秦漢魏晉時期

南北朝から明代まで

清代

五四運動後

先秦時期は、言語や文字の研究の萌芽期であるという。商周時代には、統治者の為言葉に言葉を記録したり、出来事を記録する史官がいたという。こうした「言葉の記録」が後に『尚書』になり、「出来事の記録」が『春秋』や『竹書記年』になったのだという。そして諸子百家の誕生へと発展し、のち、小学が興ったとする。「小学」という言葉は『禮記』に初めて見えるという。また、文字の起源に関する最古の記述は『易經・繫辭伝』にあるという。春秋戦国時期には、事物の「名」「実」論争が起こり、徐々に哲学が深まっていったという。この哲学思想を論じる際に言語の問題にも踏み込んだのが荀子だったという。荀子の『正名篇』には、ことばと概念の関係、言語と思惟の関係、言語の社会的決まり、方言と共通語の関係などが述べられているという。

秦漢魏晉時期は、識字教育の重視が文字研究を促し、儒家の經典である五經に対する今文古文論争が言語研究を促した時期だという。そして、この時期の特徴として、『爾雅』、『方言』、『説文解字』、『釋名』を挙げ、各書の作者・内容・与えた影響などを詳述している。また、漢末以降は、文字と訓詁面で著しい特徴があるとして、『小爾雅』、『広雅』、『字林』について同様な形式で詳述している。

南北朝から明代までは、語音研究に著しい特徴があるとする。実に多くの韻書が編まれているが、それらをさらに細かな時代区分に基づき説明している。南北朝から隋唐時代の韻書として、陸法言『切韻』、王仁煦『刊謬補缺切韻』、孫愐『唐韻』、李舟『切韻』を、宋代の韻書として『廣韻』、『集韻』、『韻略』、『礼部韻略』、『増韻』を挙げ、それぞれについて詳述している。また、これらの韻書を基に改革された韻書として、『五音集韻』、『古今韻会举要』、『洪武正韻』を挙げている。さらに、元明時代の北音韻書として、『中原音韻』を挙げ詳述している。この他、北音系統の韻書として、『韻略易通』、『韻略匯通』、

『五方元音』も紹介している。また、宋元時代には等韻学も興ったとし、等韻学韻書として、『韻鏡』、『七音略』、『四声等子』、『切韻指掌圖』、『切韻指南』を挙げ、説明している。また、古音学についても、宋代と明代に分けて、著名な学者名とその著作に言及している。

清代は、古音学と考証学が盛んであったとする。まず、古音学の基礎を築いた人として顧炎武を採り上げ、彼の著作や研究内容を詳述している。さらに、顧炎武の基礎の下、古音学全盛期に活躍した江永ら7人の学者名とその著作の内容を具体的に紹介している。また、考証学の分野では、『方言』、『爾雅』、『説文解字』などに対する考証の書物を列挙し、その特徴を述べている。また、文法研究の始まりとして、『馬氏文通』を採り上げ、その内容を詳述するとともに、その影響についても言及している。

五四運動後は、中国現代言語学が誕生した時期だという。“小学”を“言語文字学”と改めようという章炳麟の提唱は、中国古代言語学の終結と中国現代言語学の開始を告げるものだという。そして、中国現代言語学は、言語学理論研究の誕生により研究の対象が明確になり、言語学研究方法の改善により研究範囲が大きく広がったとし、拡大した範囲である文法、修辞、甲骨文、金文、方言調査、少数民族言語調査の内容や特徴に踏み込んでいく。さらに言文一致運動、共通語の基準、ピンイン方案の制定、現代中国語の規範化問題についても言及している。

2.7 中国人の著作に見える傾向

このように、中国人の見方には、まず、時間軸が非常に大きな比重を持って、すべてに優先する形で存在している。つまり、通時性が非常に重要視されている。そして、この時間軸を、政治的な時代区分を参考に大きく分け、区切った各時代の中で、語学における各種の事象を、言語事実を追う形で述べている⁸。そのため、言語事象を、ある一定の内容ごとに系統立てた分類をするということはあまりしていない。よって、中国人のアプローチの仕方は、通時性の中に各言語現象の特徴を纏める方法であると言える。

3. 日本人のアプローチの仕方

日本人のアプローチの場合も、時間軸に沿って、太古から現代へと通時的に見ていくのが一般的である。しかし、中国人の場合と大きく異なるのは、時代を区切り、その区切った時代ごとの特徴を述べるということはせず、似た特徴を持つ書物を系統ごとに追っていくという点である。

ここでは、その具体例として、頼惟勤氏と水谷誠氏の『中国古典を読むために』、大島正二氏の『漢字と中国人』及び『中国言語学史 増訂版』の3冊を例に採り、見て行くことにする⁹。

3.1 頼惟勤著・水谷誠編『中国古典を読むために』

まず、『中国古典を読むために』の構成を概観する。本書の内容は次の3部に大別される。

小学書の先駆

韻書の成立 小学書の発展

最初の内容が、小学書の先駆、とあるように、本書は、訓詁学史に最も近いとされる『漢書藝文志』の内容の紹介に始まる。『漢書藝文志』の叙録に書いてあるとされる小学の起源に触れ、六書とは何かを具体的に概観する。そして、小学書の代表として『蒼頡篇』・『凡將篇』・『急就篇』を挙げる。また、いろいろな訓詁の書物の土台の上に、意味を中心に分類・整理して編纂された、最古の義書である『爾雅』を挙げ、その内容を具体的に述べている。そして義書の代表的なものを古いものから順に『方言』、『釋名』と見ていく。その際、各書物の撰者・内容・特徴などを詳しく述べている。一方、形・音・義のうちの形の分野にあたる『説文』も取り上げ、撰者・編纂目的・内容・特徴などを細かく説明している。しかし、この時期、形・音・義のうちの音の分野にあたる韻書はまだ誕生前なので特に言及されていない。

次に、韻書の成立、の部分では、まず韻書誕生の必要に繋がる、形の分野について、『説文』からの流れを持つ『字林』、『玉篇』を挙げる。この際も、もちろん各書物の撰者・内容・特徴などを述べている。また、『玉篇』については、原本と大広益会本との比較も行っている。そして『玉篇』に反切が付されていることから、反切・声調について概観し、切韻系韻書の説明に入っていく。この際、『切韻』から『広韻』への流れを、各種の具体的な韻書名およびその撰者や内容への言及も含め述べている。それから、韻図へと移っていくのであるが、まず敦煌から見つかった守温の30字母について説明し、次に韻図の基礎となる36字母の各々の音や韻図の見方について詳しく述べている。その後、韻図の集大成として『韻鏡』に言及する。また、その他の韻図についても適宜説明を加えている。

最後に、小学書の発展、では、いろいろな書物の集大成がなされた時期だからという理由で、宋・元・明の各時代ごとに主要な書物名とその内容を概観するほか、形・音・義の内容ごとに宋代以降をひとまとめにして主要書物とその内容に言及するという二つの方法が採られている。また、ヨーロッパの影響の具体例として、明末期に中国にやって来た宣教師ニコラス・トリゴーが作った、ローマ字表記の書物『西儒耳目資』への言及が見られる。

3.2 大島正二の『中国言語学史 増訂版』

次に、『中国言語学史 増訂版』の構成を概観すると、その内容は次の6つに大別される。

義書
字書
韻書
等韻図
清朝における言語研究
近代における言語研究

義書、の項では、義書の誕生として『爾雅』に、方言書の誕生として『方言』に、語源探求書の誕生として『釋名』に、成書年代・撰者・内容・体例・テキスト・資料価値・後

世への継承状況など、実に多方面から詳細に言及している。

字書、の項では、まず識字教科書として『急就篇』を挙げ、字書の誕生として『説文解字』を挙げ、その発展として『字林』、『玉篇』、『類篇』に言及している。そして字様書の誕生として『干祿字書』、『五經文字』、『新加九經字樣』を解説し、字書の変容として『龍龕手鑑』、『五音篇海』、『字彙』、『洪武正韻』、『正字通』に言及している。それぞれの書物への言及方法は、撰者・内容・体例・特徴・資料価値など、あらゆる面に及び、かつ具体的である。その中でも、文字学の金字塔といわれる『説文解字』については、特に多くの頁を割いている。

韻書、の項では、まず反切と四声について概観した後、『声類』、『韻集』、その他の『切韻』出現以前の音韻関係文献を紹介する。その後、韻書の集大成として『切韻』を詳説し、続いて王仁昫『刊謬補缺切韻』や孫愐『唐韻』、李舟『切韻』など、様々な切韻系韻書に言及している。また、『切韻』の最終的増訂本である『広韻』の詳説を行うとともに、『広韻』の略本である『韻略』や『礼部韻略』などにも言及している。その他、韻書の改新として『五音集韻』や『古今韻會舉要』、『洪武正韻』など、多くの書物に言及している。また、曲韻書として『中原音韻』についても詳しく述べている。その際の手法については、必要に応じ、撰者・内容・体例・編纂の経緯・書物の構成・版本・テキストなど、多岐に渡る項目を掘り下げる形を採っている。

等韻図、の項では、等韻図誕生に至るまでを概観した後、『韻鏡』を、撰者・成書年・内容・構成原理・用語・日本における韻鏡研究史などにまで踏み込んで詳説している。その後、等韻図を特徴ごとに三派に分け、それぞれの派に属する書物に言及している。その第一派は『韻鏡』と『七音略』であり、第二派は『四声等子』・『切韻指掌図』・『切韻指南』・『皇極經世書聲音唱和図』であり、第三派は『韻法直図』と『韻法横図』である。

清朝における言語研究、の項では、清朝考証学について、音韻学・文字学・訓詁学、すなわち音・形・義の三つと、これに文法学を加えた、合計四つの分野からの言及を試みている。まず、音韻学に関しては、その下位分類として古音学・今音学・等韻学のそれぞれの分野における注目すべき学者名と彼らが提唱した自説を具体的に紹介している。文字学では、説文研究および金文・甲骨文研究における主要著者とその著作の内容について紹介している。訓詁学に関しては、語義研究と語源研究における主要著者とその著作の内容について紹介している。文法学に関しても、主要著者とその著作の内容について紹介している。

近代における言語研究、の項では、音韻研究、文法研究、方言調査と古文字研究、の三つに分け、それぞれの動向について述べている。音韻研究では、特に業績の多いカールグレンやマスペロの説に言及するとともに、上古音や中古音研究を総括している。文法研究では、王力や呂叔湘や高名凱などの書物とその内容を紹介している。方言調査と古文字研究では、方言調査については趙元任、羅常培、董同龢などの名前およびその著書を挙げ、古文字研究については羅振玉、王国維などの名前およびその著書を挙げ、それぞれその内容を紹介している。

3.3 大島正二の『漢字と中国人』

また、『漢字と中国人』を見ると、内容は次の5つに分かれている。

漢字は誰が作ったのか
義書
字書
韻書と韻図
簡略化・ローマ字化の試み

しかし、それぞれに割いた紙幅から判断すると、義書、字書、韻書と韻図、の3つに力が注がれていることが分かる。漢字は誰が作ったのかでは、漢字の誕生から識字テキストの成立要因までを広く述べている。義書、の項では訓詁の最初の集大成として『爾雅』に、語源の探求書として『釋名』に、漢代方言の記録書として『方言』に言及している。字書、の項では、字書の金字塔として『説文解字』、『説文解字』の増補版として『字林』、新種の字書として『玉篇』、『玉篇』の増補版として『類篇』、字書の改新として『龍龕手鑑』、『五音篇海』、『字彙』に言及している。韻書と韻図、の項では、韻書の集大成として『切韻』、『切韻』の最終増訂本として『広韻』、革命的韻書として『中原音韻』に言及した後、韻図について概説し、近代的な音節表と言える『韻鏡』に言及している。簡略化・ローマ字化の試みでは、外国との接触によって意識され始めた漢字改革論の様々な試みを紹介し、注音字母の制定から表音ローマ字の制定への流れ、簡体字の誕生など、近代の状況を時系列に言及している。

3.4 日本人の著作に見える傾向

採り上げた3冊の書物に共通して言えることは、いずれも似たような傾向を持っているということである。つまり、これらの本は、いずれも結果的には太古から現代へ通時的に視点を移しているのであるが、それは、あくまでも系統ごとに内容を追跡した結果としてそうなったということである。

このように、日本人の見方は、時間軸を考慮はするが、それが第一の地位を占めることはない。あくまでも、個々の言語事実の系統性を重視している。つまり、似た特徴を持つ書物を系統ごとに追っていくわけである。具体的に言うと、日本人のアプローチの仕方は、小学の基本である形・音・義の三系統ごとに、各特徴に関連する内容を持つ書物を見ていくことで、各言語現象の変化の特徴、流れを把握する方法であると言えよう¹⁰。

4. 結論

以上を踏まえると、中国人と日本人の中国語学史へのアプローチの仕方の特徴は以下のように整理できると思われる。

共通点：時間軸に沿って、太古から現代へと視点を移していく。

相違点：中国人は時代を区切り、区切った時代ごとの特徴を顕著に持つ書物を提示することで、語学史の大きな流れを一つ作ろうとするが、日本人は時代区分にはあまり拘らず、

似た特徴を持つ書物を系統ごとに追うことで、語学史の複数の流れを見ながら、最終的にそれを一つの大きな流れに集約しようとしている。

5. おわりに

本稿では、中国人と日本人の中国語学史へのアプローチの仕方にどのような特徴があるのかを、日中で出版された中国言語学史に関連する著作を概観することで整理してきた。

しかし、採り上げた著作数からも分かるように、日中の対比という面では明らかにバランスを欠いていることは否定できない。この点は、早稲田大学教授 古屋昭弘氏も指摘するところである。古屋氏は、その原因を日本側に比較すべき著作がないこと、すなわち、日本には中国言語学史と呼ぶに値するものがまだないことにあるとした上で、そのような状況下で「中国人と日本人の中国語学史へのアプローチの仕方」の違いを云々するのは早計ではないかとの疑問を呈している。

確かに、この指摘にはもっともな一面があると筆者も思う。しかし、そうであるならば尚のこと、筆者は本稿に対し、今後日本のこの分野において、中国の著作に拮抗するだけの著作が執筆される呼び水としての役割を期待したい。そう考えると、現段階における日中の傾向を整理することも意味があるのではないだろうか。

註

- 1 本論文でいう中国語学史とは、中国語を音韻史・文法研究史などのようにある特定のテーマに範囲を限った視点からのみ扱ったものは除外し、それらを全て総合したものを範囲とする視点に立つもののみを指す。
- 2 () 内は前後の文脈から判断した、筆者による補足である。
- 3 原文は、「…王力的中國語言學史，是第一次對這門學問作全面的敘述，其貢獻自是不可磨滅的。」(周法高『論中國語言學的過去、現在和未來』p.17)。日本語訳は筆者による。
- 4 原文は、「这部书科学地清理了中国语言学历史，为中国语言学史勾画了一个清晰的轮廓，筚路蓝缕，开创之功不可磨灭。今天讲中国语言学史还离不开这部书。」(赵振鐸『中国语言学史』p.10)。日本語訳は筆者による。
- 5 この時期区分については、周法高氏により欠点が指摘されている。その欠点の詳細については、周法高『論中國語言學的過去、現在和未來』(pp.11-14) および牛島徳治『日本における中国語文法研究史』(pp.9-11)を参照されたい。

だが、趙振鐸氏による「言語研究の特徴に基づき、社会の歴史状況と関連づけ、文化背景と結びつけて考察すると、王力氏の中国言語学史の時期区分に関する意見は基本的には正確である。」との言及もある。趙振鐸氏の原文は、「根据语言研究的特点，联系社会历史状况，结合文化背景进行考察，王力先生关于中国语言学史分期的意见基本上是正确的。」(赵振鐸『中国语言学史』p.5)。日本語訳は筆者による。
- 6 周法高『論中國語言學的過去、現在和未來』p.1およびp.2。

- 7 右文説とは、形声字の声符は、常に漢字の右側部分にあるとする考え方である。
- 8 中国人が時代区分を重要と考えていることは、趙振鐸の次の言葉からも分かる。
 「研究历史，分期非常重要，分期的目的在于历史的线索更加明确。(歴史の研究には時代区分が非常に重要である。その目的は歴史の手掛かりをよりハッキリさせることにある。)」(趙振鐸『中国言語学史』p.5)。日本語訳は筆者による。
 また、周法高が「論中國語言學的過去、現在和未來」の中で、「中国言語学史の時代区分の討論に関して」という章を設けていることから、中国人が時代区分を重要と考えていることが窺える。
- 9 実は、香坂順一氏も『中国語学の基礎知識』の第 章 (pp.23-113) で「中国語の簡史」と題して中国語の歴史について述べている。彼の手法は、時代区分を行い、区分した時代ごとにその特徴を述べるというものである。しかし、彼自身が本文中でその都度出典を明記していることから分かるように、本書は中国人の著作からの引用が多く、中国人の考え方を踏襲している部分が多い。そのため、純粋に日本人独自の考え方として採用するのは難しい。また、内容をみると、文法の特徴を具体的に述べたものが主流となっている。よって、ここでは彼の書は採用しない。
- 10 中国語学史に対するこのような見方は、中国語学研究会編『中国語研究史』(江南書院、1957) にすでに見える。『中国語研究史』では、研究史篇の[1]古典としての文字訓詁学書の項で、次の4つの小見出しを付けている。§1 はしがき、§2 韻書の成り立ち、§3 字書韻書の変貌、§4 小学の発展、である。また、辞書と研究書解題の項では、次の7つの小見出しを付けている。§1 はしがき、§2 字体を主とした字書、§3 字音を主とした韻書、§4 訓詁の字書、§5 類書、§6 総合的な実用字書、§7 ことばの字書、である。この書が後に中国人の手により中国語に翻訳され中国で刊行された事実から推察すると、その内容は中国人の考えを踏襲したのではなく、日本人独自のものである可能性が高いと言えるのではないだろうか。

参考文献

- 王力『中國語言學史』，五南圖書出版公司，1996
 (初出は雑誌『中国語文』1963年第3期 - 1964年第2期，のち山西人民出版社1981)
- 周法高『論中國語言學的過去、現在和未來』，香港中文大學出版，1966
- 周祖謨『漢語發展的歷史』『中國語文研究』創刊號pp.3-12，香港中文大學中國文化研究所，1980
- 朱星『中國語言學史』，洪葉文化事業有限公司・中華發展基金管理委員會，1995
- 趙振鐸『中国言語学史』，河北教育出版社，2000
- 濮之珍『中國語言學史』，上海古籍出版社，2002
- 中国語学研究会編『中国語研究史』，江南書院，1957
- 香坂順一『中国語学の基礎知識』，光生館，1971
- 牛島徳次『日本における中国語文法研究史』，東方書店，1989
- 頼惟勤著・水谷誠編『中国古典を読むために』，大修館書店，1996
- 大島正二『中国言語学史 増訂版』，汲古書院，1998
- 大島正二『漢字と中国人』，岩波書店(岩波新書)，2003